

廣益俗說辨十四

遺編 婦女僧道人物佛家
地理草大水火土石
果蔬寶貨器用或問
飲食禽獸魚蟲

13

954

15

廣益俗說辨遺編廿八目錄

婦女

補

秋宮^{サイクウ}と恬子^{チンシ}内親王^{ニシノミ}より後^{ダシ}改^セ姓^{セイ}と云^{イハ}況^{キョウ}

秋宮は御子
皇女は御子

補

神賴^{ミヤノモリ}義^{ヨシ}乃^ノ母^{ハハ}修^{シユ}理^リ令^{ノリ}婦^{メノ}の^ノ況^{キョウ}

僧道

補

西^{ニシ}行^{コウ}法師^{ホウシ}崇^{スミ}徳^{トク}院^{イン}御^ミ廟^{ボウ}と^ニ指^{サシ}て^テ秋^{アキ}と^ニ後^{ノチ}親^{ミコト}

雜類

人物

補

萬^{マン}葉^{エフ}と^テう^ウ海^{カイ}々^ゾ鬼^{クニ}子^コと^ニ云^{イハ}況^{キョウ}

補

あ^アら^ラび^ビせ^セい^イ天^{テン}文^{モン}と^ニ中^{ナカ}小^コと^ニ海^{カイ}々^ゾと^ニ云^{イハ}況^{キョウ}

年詳二叔
九 菟道磯津貝内親王 天皇女 皇女 十 酸香手媛

内親王 用明四皇女 在任七十年 十一 大來内親王 天皇女 皇女 十二 多紀子内親

王 天皇女 皇女 十三 阿閉内親王 天皇女 皇女 十四 當春内親王 天皇女 皇女 十五

泉内親王 天皇女 皇女 十六 田形内親王 天皇女 皇女 十七 多紀内

親王 天皇女 皇女 十八 久勢内親王 天皇女 皇女 十九 井上内親王 天皇女 皇女

女在任七十年 二十 縣内親王 天皇女 皇女 二十一 小宅内親王 天皇女 皇女

太平勝 二十二 安倍内親王 天皇女 皇女 二十三 酒入内親王 天皇女 皇女

五年 二十四 御遷内親王 天皇女 皇女 二十五 朝原内親王 天皇女 皇女

九年 二十六 布勢内親王 天皇女 皇女 二十七 大原内親王 天皇女 皇女

九 仁子内親王 天皇女 皇女 二十八 氏子内親王 天皇女 皇女

九 宣子内親王 天皇女 皇女 二十九 亮子内親王 天皇女 皇女

九年 三十 松子内親王 天皇女 皇女 三十一 恬子内親王 天皇女 皇女

女在任 三十二 識子内親王 天皇女 皇女 三十三 楊子内親王 天皇女 皇女

昌泰元年 三十四 繁子内親王 天皇女 皇女 三十五 元子内親王 天皇女 皇女

本康親王三女 三十六 柔子内親王 天皇女 皇女 三十七 雅子内親王 天皇女 皇女

在任六年 三十八 齊子内親王 天皇女 皇女 三十九 微子内親王 天皇女 皇女

醍醐六皇女号六系赤 四十 英子内親王 天皇女 皇女 四十一 旅子内親王 天皇女 皇女

王 重明親王一女在 四十二 樂子内親王 天皇女 皇女 四十三 輔子内親王 天皇女 皇女

親王二女在任 四十四 隆子内親王 天皇女 皇女 四十五 規子内親王 天皇女 皇女

村十五皇女在 四十六 齊子内親王 天皇女 皇女 四十七 恭子内

親王 任明親王女在 任二十三年 平當子内親王 三條院女在任 三年長和五年 平二博

子内親王 具平親王嫡女在任 十八年寛仁二年 平二良子内親王 後朱雀三皇女 在任七年長元九年

平三嘉子内親王 小一條法皇女在任三年永承九年小一條法皇諱ハ 敦明長和五年為東宮寛仁九年八月九日諱東宮 有院号長久三年八月十六日 御出家号小一条法皇 平四敬子内親王 敦平親王女在任 廿五年永承四年 平五俊

子内親王 後三条五宮女号通口 平六淳子内親王 敦賢親王 女在任三年 承保 平七嫚子内親王 白川六皇女号郁芳門院 平八善子内親 王 白川七皇女号六角院 在任十九年寛治三年 平九侑子内親王 白川七皇女在 任十四年大永二年 平十守

子内親王 輔仁親王二女在任 十七年天治二年 平二妍子内親王 鳥羽十二皇女号 吉田赤宮在任七 年康治 平三喜子内親王 堀河四皇女在任 三年仁平二年 平三亮子内親王 後白河十二皇女保元 二年一不遂郡行 平四好子内親王 後白河十二皇女号 在任十六年永承九年 平五休

子内親王 後白河十三皇女自 平六惇子内親王 同帝十四皇女 在任三年 平七範子内親王 高倉五 皇女 平八紫子内親王 同帝七皇女在 任十二年文治二年 平九肅子内親王 後鳥羽十二皇女 号高辻在任五年 平十熙子内親王 同帝十三 皇女在任 五年建 平十一和子内親王 後三条四皇女号武範門 院在任五年 平十二昱子内親王 後白河九皇女号宣花門院 在任四年文應元年 平十三曦子内親王 土御門九皇女号宣花門院 不遂郡外寛元二年 平十四愷

子内親王 後嵯峨法皇女号 在任九年弘長二年 平十五禁子内親王 後白河九皇女号宣花門院 在任九年弘長二年 平十六子内親王 以上七十八代なり 平十七盛徳云々 平十八

平十九子内親王 以上七十八代なり 平二十女太神女 平二十一帝の御女也 平二十二和入姫より後宮多帝女 平二十三

平二十四帝の御女也 平二十五和入姫より後宮多帝女 平二十六

平二十七帝の御女也 平二十八和入姫より後宮多帝女 平二十九

平三十帝の御女也 平三十一和入姫より後宮多帝女 平三十二

平三十三帝の御女也 平三十四和入姫より後宮多帝女 平三十五

平三十六帝の御女也 平三十七和入姫より後宮多帝女 平三十八

平三十九帝の御女也 平四十和入姫より後宮多帝女 平四十二

平四十三帝の御女也 平四十四和入姫より後宮多帝女 平四十六

平四十七帝の御女也 平四十八和入姫より後宮多帝女 平五十

平五十一帝の御女也 平五十二和入姫より後宮多帝女 平五十四

平五十五帝の御女也 平五十六和入姫より後宮多帝女 平五十八

平五十九帝の御女也 平六十和入姫より後宮多帝女 平六十二

平六十三帝の御女也 平六十四和入姫より後宮多帝女 平六十六

平六十七帝の御女也 平六十八和入姫より後宮多帝女 平七十

榊子肉親王にいつる由で亦七十八代乃
 親王の世に十一代より一欽明天皇の
 内宮肉親王乃代として度々之に門氏の元祖
 大神皇小神の世より宮子と亦一としてあは
 たり今亦之に又後乃丸とて小山と曰ふ
 大水西ノ小の社事前乃社といふれあふ度々氏乃
 西接乃肉乃一社なりかりあふ人乃ひとあ
 まなちあふ世にわたり考ふべし
 伴イヨミ源カミ賴義母ヨリヨシ修シユ理リ命メ婦フ乃ノ祝
 俗説云冷泉院レイセイイン在代ヨリノ信時シンジのみと一條院イチジョウインの妻女

伊豫古源損義母修現令婦乃祝

俗説云冷泉院^{レイセンイン}に當代^{トウジ}頼信^{ヨリノブ}時のみどつ條院^{ジョウイン}の妻女

命婦とて女を召して慈慕しなびく
 玉璫とをり方にいづての進み帝のふと
 ありきついでわたりておどろきしめられ命婦
 沢粒燈よりいづてはまかりおれ方となりぬ
 年二月又婚姻さうひあるに又年四月九日男子
 生れしとて子と名づけられ後より子孫あり
 ありきなり

今按るよは既^{キヨモウ}虚あり但^{タマ}一^{ケイツ}大系号^{ヨリヨシハニ}は義母^{シユ}體^リ理^{メイ}命^ブ婦^キと記^キしつるを以てわとりとあそぶ事^{ケイツヲヨヒワロンゴ}と附^フ会^{カイ}しつるものなり大系号及和漢記に源

よきなりてハ、やまじうれむの床とてをかし
 後わゆるふせむ 後醍醐天皇云崇徳院少府卿の西三里少府卿
 よかり後松とて白雲寺のふ寺なり後醍醐天皇
 号とて貞観二年乃建之なり寺の少は後醍醐天皇
 尊とてふよは崇徳院の少府卿なり左は為義乃邪の右は乃後房
 と洞林院と 少なり紙考して後醍醐のお遠と知べし

雑類 人物

補 生てうゆりて鬼子と云は
 作る齒むいてうゆりて鬼子と云は
 ありと云ふ

今按るに聞見雜錄云邵康節生初生髪被面

有齒能呼母とありと云ふなりてあへて長き
 後聰明の偉人となつとわんは鬼子なりとて
 ありと云ふはあへてなりと云ふなりと云ふ
補 あわびせの天文中にありと云ふなり
 後醍醐云わびせの天文中にありと云ふなり
 小水と云ふなりと云ふなりと云ふ

今按るに黒川氏云正月去年有娶新婦者則朋
 友聚其家入氷於桶大灌其以是後除之謂也孝
 德帝御宇粗有其儀 日本紀云孝德天皇二年詔夫嫁之女
 適人時於其姑斯夫婦使後除之れあり
 あわびせの 而後其人設酒食開浴室而謝之是為水

懸振舞倭俗灌木曰加俱留饗應曰振舞は
税よつるごとく申あひまの依り上りたりとぞより
天文年中よりトはもつるよはわつと

補

二月二日奴婢出易の税

俗統云奴婢の出易へじつ三月二日かりがぬありて
二月二日にさる近年の二月八日ふり

今振る小黒川道祐説云雲崎類要云秦人生一
子惡之乞與隣家大富貴本家貧後以二月
二日取歸後復富鄰家乃貪とりり中朝きて
二月二日奴婢と出易せりじつとさふり

くろくべとつりは税のいとも修らるまたふり

此二月二日出易せり事終る

補

愛想茶と愛税

俗るつる乃神は道の佛は愛想はうめては茶と
むらじとひて賣るあり

今振る五雜組云金陵人有賣藥者車載
大士像問病將藥從大士手中過有留於手不
下者則許人日獲千錢大士手是磁石藥有鐵屑
爾とわぬべ我初のふとあつてとるふり
か、我茶などともむり小用さるるべ

俗説新編

二

佛家

補 あり俗説卒天よ昇る説

俗説云じうある俗生かぐう教卒天よといひのり
田十の海の傍とくうとてお供ふ

今按るに白目に老のつらよあはれ幻術とあり
て病眼目とくう術とてといひのほもつるやうにを
くうものなり李卓吾評卷一笑云鄂城人
あり海濱より多れ幻術と名せりある日お供
くう人あり令とせりて術とのぞむるに婦人を
うけててまよひく天よのつて仏桃とあるとく

縄一糸とまよひかゝる縄れりてとて投あぐるに
縄とくよと天ならすにに荒く史縄よれつとる
かりて天まより桃とあげあると系たふ紙を
帯よりあつてくうてくうよ甘きつ絲よあえ
たりかるとくうよはにるふ天よとさくぐとあわ
りてその若く肩と肢體とをげおとせり血を
たぐよとあびとて婦地よひとてはてい
まけ術と名ひくくくうれども天のいり
よあはれに今日天約つたあはれとくうとて
神とくよとあつてくうれらよとてかりてあは

俗説新編

二

然へ華りてへ〜とふわつすもろものごとくあら
るをそれ令教多とあ〜ふ婦肢體とあらせて
人の形と形 除遺よとてとやく起らるべし
とてを除遺の中より残へたなりやとふ婦こ
なて〜なりとふ〜と文體を負か〜と坐よ
せ〜とわり是天よのが〜と〜と
殺され〜と〜と人乃目と〜と申て〜と
名〜とあがり目此僧が天よのかりと〜と
幻術とめりて愚昧とわ〜と〜と残とすし
此の〜と〜と

補 わる僧遷化よ天花ゆり

俗説云わる僧乃遷化よ中よりと〜と
今按る〜と癸辛雜識云戊子五月初二日以來日光
中有若柳絮如雪片々者飛舞乱下人皆因
傳爲天花者至初四日大雷雨飛電大者當三錢
始識連日所謂天花者即雪也及飛下則以雹耳
蓋小片半空已化於烈日中大者乃乘風而墮耳
又云寧宗嘉定甲戌九月朔日日已食之既日傍
有星見及有飛片如雪母之狀自天飄下今之天
花殊類此也と〜と目此とて天花ゆり〜と〜と

俗説云わる僧乃遷化よ中よりと〜と

はたぐひなることなり

補 あり信火イハは焼ヤケざる説

俗説云じくある俗傳は乃ノ不レ後キとせんとして坐イと坐イ一ハたちタチは薪タキは法ハと火ヒと法ハに薪タキとくくとのえられどもと身ミはけくかゆとよ

今按イに神仙傳云吳人姚光ヨウ有火術リクニツメコ令吳王積ツキ荻千束タキ火焚荻了タキ盡光タキ恬坐タキ灰中タキ振衣而起タキ河タキ口タキ乃士人の目とくまうてありのみ俗と幻術とゆつてわざとひとくまうの佛法と西域の人ゆへいなりかた怪クハイ異イわんや

廣益俗説辨遺編廿八終

廣益俗説辨遺編廿九目錄

地理

補 四海といふ説

補 近江アヲミと多タ子ハ村ミれ説

補 女メ獲ゴ傳ワり説

州木

補 本モ小コ文字モジあり説

補 門カド松マツれ説

補 楓カエデとのみらと別マ説

補 本キツ以チ代チて血チ出る説

補 本石より云云

火

補 振津島二根坊火河内島波火全島油盆の元

水

補 物とありふと云云

補 有る後書湯の元

補 江尻媼の元

附 倭屋島熱海平島湯河内法亦湯并に
美濃島念佛川等の元

補 播磨國ふたつの水元

マサズ
コラス

廣益俗説辨遺編廿九

地理

補 四海と云云

俗説の四海といふ日本國中の如きりて稱するや

一記し

今振るに博物志云四海七戎六蠻九夷八狄とあり

考へては

補 近江島子村の元

俗説云全島に國をなす村ありは子村といふべし
村の老依ありゆくとて素と友とありはあづき二年後

でかゝるどろの女年とくかゝる夫よりなれば友ならひ
乃ねとまんこはねそれ数い女れ後よりとててゆ
りには女とみて十月とふよ人の手ひと川うも
うりそいなりは村とて孕村とて後より署してとて村
と名はをたなり

今^{イマ}搦^ニる^ニも李^リ卓^{タク}吾^ワ開^{カイ}卷^{クワン}一^{イチ}笑^{セウ}云^ニ鄆^{キン}縣^{ケン}民^{ミン}某^{ミナ}出^デ賣^{バイ}妻^セ與^ト其^{ソノ}姁^メ同^ニ處^ス夫^ハ久^ク不^レ歸^{カハ}見^ミ夫^ハ兄^ニ私^シ心^{シン}慕^ボ之^ヲ成^ニ疾^{ヤク}阨^ニ危^キ家^カ人^ニ知^チ所^ヲ以^テ且^カ憐^{レン}之^ヲ計^ハ無^ク所^ヲ出^デ強^ニ伯^{ハク}氏^シ從^{ヨリ}帷^イ外^{ガイ}以^テ手^テ少^シ拊^フ其^ノ腹^ハ遂^ニ有^ル感^{カン}成^ニ孕^ニ及^ニ產^ハ惟^ニ一^{イチ}拳^{ケン}爲^ス之^ヲ乃^ニ孕^ニ村^ニの^ハ事^ニと^ハ同^ニ日^ニの^ハ候^ニ又^ニは^ハ税^ニを^ハ日^ニ々^ニ々^ニ事^ニと^ハせ^ル

ふまごつまびらうあむど周言男女此あうひの初
なごふ同くせびあう紙いもんや已がまどりの
化埒^{タフ}の腹^{ハラ}よるふたえんや倫^{リン}と礼^{レイ}の罪^{ツミ}逃^{ノゲ}る
あうに物^{モノ}まともと扱^{ハラ}はま^マりとて奏^{ソウ}さう
ひご^{ヒゴ}屋^ヤあうふは不義^{フギ}をあてさうやを
旅^リはぬさぐんとあをりてにけ怪^{クワイ}説^{セツ}をゆうと
あてあうひ^ヒととてさうひあ

女護^{ニヨ}の親^{コノ}

借説云日本國此近き所より此女獲りてと云と
とあり男ゆけをせめて久きと云と

今按るゝ貝原益軒云八丈橋の目方乃東にあり
首の女人れありしとや女後橋といふ丈橋女
かゝる事似小條又代記に記さるるにたり予
考るゝに參同契集解云女人之國無男子若
欲孕則必擇日一日三時俯觀井底亦借真
水之氣是井中之象以為交感方能懷妊所謂
陰陽施化之精天地自然相感之道若此金樓
子云女國有潢池浴之而孕也道女後橋乃事
なりとべし。但女人れありてみよとせしと
ハ修用とるふたりとるなり

草木

補 本に文字あり

俗説云ある國中本とるてとりたりしと内と文字
ありとふとひてある神社よかあるとふ

今按るゝ夢溪筆談云木中有文多是栲木
治平初杭州南新縣民家折栲木中有上天大
國四字。春渚紀聞云三衢毛氏庭中一木忽中裂
而紋成行字。替神錄云梁開平二年使其將
李思安攻潞州營於營口伐木為柵破一大木木中隸
書六字曰天十四載石進かゝるたぐひの世よおはる事

あてあつしごとろになつて

補 門松の呪

俗説云正月門松とておとしめりあつてよいかと云ふ
と巨且が墓ぢうけいすあひたるものなり

とあつて歳華紀麗云松標高戸董勛問禮俗有歳

何哉以旅性芬香又堪作樂又繫松枝于戸同此義け松乃枝とて戸のかかるをばかひて

門松びそとめつるものなり

補 桐とりみづと訓説

俗る桐字とりみづとてかえでたよめり

今按ふ小山海南荒經云有宋山者木生山上名

曰楓木今桐香樹也號迷々香とてふやひある木

かして目を玉滑機樹と同やうなるといふべし

補 木と伐て血出る呪

俗る木と伐て血出る呪ありと云ふ

今按ふよ玄中記云百歳之樹其汁赤如血と云

これ赤さ汁少く血ふあつて木の中は歟と云ふ

と云ふ風俗通は桂陽太守江夏張遼叔高木は

伐しむるよ木の中より血も叔高老樹ハ汁出血よハ

あつてとてさうなれば白蛇公長四尺なりなり

が四肢蛇出ハ叔高とてさうなりと云ふ人なり

わうど無ふとわうぬものなり 世に終る 終るものなり
伐たふとわうとるなり

補 本石より沈

俗説云陸奥國の内ある寺達立のためは材木とあり
ゆゑ一が石より沈むとて角木と名づけられた
ゆゑ今ふのとあり

今按るよそのは杉櫟とせしむるなり
さきふとありしより録異記云婺州永康縣山亭中
有枯松樹因斬之誤墮水中化為石取味化者

試於水隨而亦化焉其所化者枝幹及皮與松無
異り海ありとせしむるなり

火

補 接津は二恨坊火海内は波火近には油盤の沈

俗説云接津は二恨坊火といふあり海内は油盤の沈
火といふあり近には油盤といふありて花を
らるといふ

今按るよそのは燐火なり本州云田野燐
火人及牛馬兵死者血入土年久所化其色青狀
如炬沈存中筆談云揚州有一火甚大其行如飛殆

類日光老學菴筆記云予年十餘歲見郊野
 間火至多麥苗稻穗之抄往々出火色正青俄
 復不見蓋是時去兵乱未久所謂人血為燐者終
 不妄也湘山野錄云柳仲塗開因曰余頃守維
 揚郡堂後菜圃綠陰雨則青燄夕起觸邊則
 散何耶寧曰此燐火也兵戰血或牛馬血著土則
 凝結為此氣雖千載不散柳遽掘之皆新鏹折
 鐵乃古戰地也云云又謂二根坊火燄燄益多
 びたらしむるべし

水

補

抱水よりふと云

俗説云抱水よりふと云

今按小謝肇淪五雜俎云易州湖州之鏡阿
 井之膠成都之錦青州之白丸子皆以水勝耳至
 於婦人女子尤關於水蓋天地之陰氣所凝結也燕趙
 江漢之女若耶洛浦之姝古稱絕色必配之以水
 豈其性固亦有相宜不聞山中之產佳麗也吾聞
 建安一派自武夷九曲來一瀉千里清可以鑒而
 建陽士女莫不白晳輕盈即輿僮下賤無蠢濁肥
 黑者豈非山水之故耶女胡少て系初のふれ他邦

よとられたるを稱じると同様なり

補

有る後書湯の状

俗説云接津寺有るに後書湯といふなり婦女其後
一々其がさるに道なりと云ふと云

と接しにこれをもめうしめて妙女泉といふ

たぐひしとあやうしといひしとと秘笈古今類

書纂要等云并州有妙女泉婦人靚粧綵服至

於其地必興雲雨と云ふなり後書湯といふなり

及ふは書湯とながけたるなり

兄姐が池の記

附録 兄姐が池の記 是の湯は法承湯

俗説云接津寺に池ありと云ふなり

又傳云國勢海に平なる湯といふなりと云ふ

又傳云國勢海に平なる湯といふなりと云ふ

又傳云國勢海に平なる湯といふなりと云ふ

又傳云國勢海に平なる湯といふなりと云ふ

又傳云國勢海に平なる湯といふなりと云ふ

又傳云國勢海に平なる湯といふなりと云ふ

今按ふにさるは接津寺のたぐひなり

安豊郡吐泉在淨戒寺北至泉旁大呼則大湧小

呼則小湧若吐之其湧出弥甚世人奇之號曰吐

補

播磨國不減のあり

泉とありとるるべし——鈴秋峯熱海地志論諸泉
 云茅山乃極寒泉い常と拍あるとれと湧沸る
 喜客泉ハ客いつとて湧出を別の特泉と
 笑ふとてけととるる湧岳陽府の雙泉
 人ハ声とてけと無沸つ終は異なり西寧
 街の泉ハ人の足も火とてけととるる湧あり
 多麓瀑布に人れとてとて漫漶とる
 とありとるる考へるるべし
 今者わりのいふわりの自然といひて各づけたり
 念仏のこゝろとてあるものといふものもあらず
 年終湯法寺湯金仏川ハむり年終法寺と

俗説云播磨のうらふ不減のありあり
 てと増むとてけと減むといふも依國れうらふと
 又同くさ水ありといふ

今按るよ録異記云藥水在房州西四十里水一
 穴徑二尺土井深三四尺水常數寸不耗不溢と
 たり播磨云依れと増と減ありといはれり
 いひといはるる

廣益俗説辨遺編廿九 終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

廣益俗說辨遺編三十目錄

土石

補

小石長テヨウくて大石となる説

補

相模越石河波ハミる石イシ説

補

筑後石人セキジンの説

果蔬

補

丹波タニハの父テお栗ウチクリの説

補

周防スワウ國天養果クハの説

飲食

補

柿餅カキモチの説



補 酒造の税

禽鳥

補 雞の膏^{ヨイササ}に^{シラウ}ふ^{シラウ}と云^附酒^{シラウ}場^{ヨキサト}の税

補 梟^{フクロ}の^{ナク}毛^{ナク}に^{ナク}不^{ナク}符^{ナク}と云^{ナク}の税

畜獸

補 白^{シロ}角^{カク}へ^{ツカ}福^{ツカ}祚^{カミ}に^{ツカ}使^{ツカ}者^{ツカ}と云^{ツカ}の税

補 野^ヤ婆^{ウバ}の^ヤ廻^{ウバ}の税

補 我^ワ朝^カの^ワ天^カ杓^{テウ}の^ワ税

魚蟲

補 石^{イシ}見^ミ玉^{タマ}の^{イシ}税

補 慰^イ斗^トの税

寶貨

補 六^{ロク}通^{ツウ}錢^{セン}の税

器用

補 七^{シチ}首^ウの^{シチ}税

補 六^{ロク}首^ウの税

廣益俗説辨遺編三十

土石

補 小石長く大石とあり

俗説云出羽の肉づも乃下よう小石あり一に
年々大なりなりゆきいひて社に送りと
云ふ社にありと云

今按く西陽雜俎續集云修に一寺あり
の前の漁釣のわのりあり漁子網とあり
てわづにありして網と破るこれとるは春の
ごとくあり石なり寺傍にありて松屋の中よりい

石を以てやむに年を經ておのこに十ヶ一なる
とわりなぬやと石よりてとやふふと
乃迄而よりりめづしと申にわづと

補

相模地石河波る石の石

俗説云お模まは陸石とてわりお傳ふまのうと大蛇

わたり人よりぬわの傳これと封ドてやとてとふ

接連東生郡林村めと蛙石とてわりと云又河波

玉揚浦は馬石とてわり背天馬とててやとて

ととふ

と接れぬわのどとと奇石とてわづとてわづ

閩部疏云泉之南北奇石尤多紗帽石馬

青蛇把及ふの獲石洞やと蝦蟆石ちよんろお模とわりと

の奇ふへ夢溪筆談云婺州金華山有松石又有

如桃核蘆根蛇蟹之石程史云宜都山水記云佷山

溪有金灘其石大者如釜小者如鉢鎮南海古

蹟記云石鼓山在東莞南山有石如鼓鳴具地記

云花山有石鼓大三十圍其鼓有兵則鳴金華游

録云石鍾手槌之鐘聲安撫云依よりとから歌の

奇石怪巖の海う我朝くらとてと希は足

お老いわやうくわづり

補
菴後乃石人の説

俗説云、菟塚村の石人わらびうらわらしく、人歌たふあ
よむびやとこれにあげこり、洞中よみて石とあ

洞中へ入て石とあり

今按るに人形石はさきにもふたありと盤井といふ

老のほろろるを人から釋トク日本紀ニ引テ筑紫風ニ

土記テ云ク上妻縣南有ニ筑紫君磐井墓カ石室有ニ石

人石馬石猪是磐井生平之時預所造也

日本紀と
考ふに
續

御天宮山宮院崇玉造盤井謀致して謀せらるる宮院崇玉院後一國中
院崇玉と号して後二の二割て院崇玉院後と院崇玉院九^ラ院崇玉院

ふよ道をあやまらるゝ又自然ふふなる

石とあり
録異記云
洪州建昌縣界田中有石碑石

人及龜散在地中石人倒卧者多間有立者側有

石井深而無水有好事者持火入其中旁有橫道

莫知遠近道側亦皆是石人焉又云長安富平縣

北定陵後通関卿入谷二十餘里有二洞一名東女

學一名西女學西女学洞有一名人俛首凭案而

坐形如生人茅亭客話云新都縣有僧卧像下

軀蓋生於石手足頭面衣紋纖介青黃色狀若彫

これ又何ぞなりやと林（公）と極（ス）みよ乃

押ハ本キ乃ハ系ハ二
 似ニ系ク又ハ宿ニとク
 歟ケ此モ色ケハク系ハ又ハ似ニ有ハ

又族^{シヨク}より魚^{ウイホ}の鱗^{ウロコ}ハ波^{ナミ}の紋^{モン}より如^ニく通^ニへる事^{コト}也

あはれおゝい人よ何なるをあらるべし事おのり
とわらふもあはれ天地のあはれにをいそ何とらふ
しとふをうむ

果疏

補 丹波の父歩栗の流

俗説云丹波栗へ化邦の栗よりへあつたなりといふ
一魚河のふみは栗とていふて父よなをつけし
む額とらちやあまのりあはれ父打栗といふ
今按るに北なり黒川道祐云九月處々山林

出栗丹波大栗為名産其中至大者称之謂
出落栗土俗誤言古有不孝之子以斯栗投父
而傷之因號氏々宇知栗氏々宇知即擊父之謂
也倭俗專稱父曰氏々は後とていふは
父將と誤るものなり
俗説云丹波栗へ化邦の栗よりへあつたなりといふ
一魚河のふみは栗とていふて父よなをつけし
む額とらちやあまのりあはれ父打栗といふ
今按るに北なり黒川道祐云九月處々山林

補 周防國天長果の流

俗説云周防赤松尾村といふ所は飢饉の年よへ松
果よけり果つとわら味あまうとて天長果

とあるに茅亭客話云聖宋戊申年十二月廿露
降于竹栢之上至二十日士庶技老携幼奔馳于路
以盤盂承接嘗飲之甘如飴蜜維摩經詳載甘露
此天甘露果也いたぐひかるべうたぐい飢饉乃
これに依りて民を養ふなりと云ふは傳説よ
とおもふがとぞいへんぞ周防の人よりあづかりて
他におれ人むじらぬや。人とう依怙とぞいふく
私わらんや。ふは傳説のあやまりなるべし。土地
うつろふことばなりか。うつろふ事なり

補 柿餅乃枕
カキ 壬子
信説云餅と云くはさうへ柿系よりなりけり
柿餅と名く

今按るに、^{グソク}黒川^{モチ}道祐^{カネチ}云、^{キル}月十一日^{古用ニ、月}、^{今有故州土}今有故州土、

補酒速乃從

俗説云糸更サニ一ク者物さるに違ズ一歩モ先酒サケ氏

持来とこれを活連といふ

今按ふ小非なり黒川氏云親戚朋友家官乃
人々粟田口小ちりきゆりてにふれを連ふ
多飯のきよき出ですつあみ坂連といふなりとわ
るは従ふも道へ坂と酒とをあらぐへるなり

禽鳥

補 雞の膏がはとふ種といふ説 附 鶏鳴の説
俗説は鶏は膏がはとふ種といふ説 附 鶏鳴の説
て鶏と殺といふ

今按ふ雞の膏がはとふ種といふ説 附 鶏鳴の説
の寝おびしきてあえとるがごとく 鶏鳴の説
なる人傳とるかのどいそんや禽鳥のたぐひを
や猶とせむとすむいそんこれとんといひか
一我朝のいそむとるいそむとるいそむとるいそむとる
と忘るいそむとるいそむとるいそむとるいそむとる
嚴戒罷鼓鼓聲數聲相逐出寒柵不嫌驚破紗
窓夢却怕為妖半夜啼と紙せりといふ
わさゆー 龜山全書云隣之人有雞夜鳴惡
其不祥烹之越數日一雞且而不鳴又烹之已

何れにむと云う。身とあまの神とをいふ
乃びちるむ。而邪とぞよま万後ゆとよまの
新機なりとて

畜獸

白鼠ハクソウハ後神ノチノカミの使者ツカヒと云後

俗説云白鼠ハ後神の使者なり。白鼠ある家なりと
いふ富といふ

今按るよ本州云黄金之精化為白鼠抱朴子
云鼠壽滿百歲則色白善憑人而下名曰白仲

能知一年中吉凶及千里外事是等乃怪說也
りづとそ後神の使者といふやあそ貪富もの
く室に令りあんと鼠の黒白よりんやふ
よ白鼠ハ人傷ふはとらに白鼠乃たぐひとて
ものとも妖物なり。誓神録云蕪長史者將下
居京口此宅素山妻子諫止之蕪曰爾惡此宅
吾必獨住始宿一夕有三十餘人皆長尺餘道
士冠衣得來謁蕪曰此吾等所居也君必速去
不然禍及蕪怒持杖逐之皆走入宅後竹林
中而沒即掘其處獲白鼠三十餘頭皆殺之不

赤白相間とありは硯と考ふべし日本少て俗に
いひあつて天狗の硯といふお遠きところ

魚蟲

禪 石見國龍水巻の硯

俗説云石見國海とありて教の奥あり
みづをわいてさる中に硯とあり魚とありに
向てうごきぬく魚のつらりては魚とすなわぐ
れす時海ありて魚天とわがる忌煙うごきぬく
魚とすこれ硯とわけて升天とありこれとあり

おもむきと名づくとも

今抄ふ三秦記云河津一名龍門魚之属莫
能上江海大魚集門下數十不得上上則爲龍
のたぐひなすべし海ありとぞよあり日本とぞ
うごきぬくや

補 熨斗の硯

俗説云熨斗と細く磨くところを硯とす
とも

今抄ふは硯なり熨斗ハ帛に皺と伸る器
なり熨斗乃磨くところを硯とす

張掄才古器評云漢熨斗蓋伸帛之器耳
とあるを從シヨウととべし熨斗セイトとのヌスと訓ヨミ引イン腹フツと
くしと訓ヨムある文字とぬちぐさウツハミとむのしと
よびかちり

寶貨

補

六道の魂

信乃人証 オウフ 葬るゝと此令取残と棺カニより入りと去る残と云
 中々

今按うゝ此事、徳佛終少と云ひて、及へど漢乃

せりこめかきとゆふと人へり事文類聚云
漢以来葬喪用瘞銭と云りわつて残貨と云
けとく比中よりせめてと云ふことむなげう
周言ひて程子雍華のるはあそむれは
関西の老老七人あそびゆく一日子残さう
なり僕もよく晨装とせざるはあそむ
あそむると云はれざるあそび程子のよくあひ
うかゆ人ゆふにわびてうふ一人がよくあひ
たりか子残せんぞわびたうむ一人がよくあひ
と囊中と人失ふと人ゆふとゆふてわづらん

ぞ惜しと歎ぜん程子の曰く人まゝにあら
 せぬをうしあふよわむと今あふむとさば用か
 吾れとりのて歎ずといふ道よりな朝ふて
 年付れが家人も破産の友程子入て出付け
 程が破産といれてのらうる残十文と滑川は
 れと道より十残とりのて程と實になづ程は
 うし程人といふと実て小利大換りかと思ふ程
 程額といふとあれはとて色とてこれ世の法をえと
 あうと民とめむとろり残十文とて今り
 めと滑川のそとにあらむとてかぐとせぬへ某

程と實とろり十残へ商人の家よりゆりて
 ぐとしかふとるうととるり程子及友程
 今のちの残とるせとめばと歎とるといふと
 かとるうとる程とるといふとゆとる事とて
 程とる希とるといふと

器用

程に首とるうととる
 程に首とるうととる
 今程とるなり類書纂要云に首短剣也

む 昔云く是大なるあやまりかりたふべしなり
て主君は對し此種の新とのむよそのぞきりか
んづるのむかうどくにて對しあふんと必せり人
のゆくこととあつたをゆりあふり人事とそ
受り新神は新なりこととあふりあふりだま
れりやうかいなばいふこととそ新やゆりんと
とふありとてふ人いふがねとふる事とて理
ふふ希かりまゝとわねともねとねと人
ゆりふことと新はふりかじまづぬふいの事と
ふ新とゆりあふりかりたふつとて書と讀で

自はせしゆべー○或同是下の信託解よ二社託
宣と新託とあつこととそとあつこととね人
の作あはせしゆべーくれべとてふとあわ
るむ 昔ていふは託宣文解とてこのこと
あはせしゆべーとてあひり 藤東坡が退之
と大顛書とてそと凡鄙退之家奴亦無
此語とそとあつたの託宣は食秩の坐相解と
の解とそとあつたの作とてとてとてとて
くは文育なり信託の他なりとてとてとて
とならば倭姫世紀。信坐本紀。信託次第紀。本縁。

寶基本記類聚本源等は神託と多くのせき
と神祇の人は後て書いひべし何れも
あつては託宣はかきとんや識類凡陋等
始

廣益俗説辨後編遺編引用書目

蓋前編所引用同書號
悉思之
不拘次第

神道秘傳

林道春

心御柱記

巖窟本縁

神風小名寄

荒木田
盛徳

元長記

齋宮次第記

日本紀聞書

上郎
兼治

舊事玄義

慈遍
僧正

石見女式

延佳神主書簡

新勅撰和歌集

中右記

日次記

江北佐々木日記

菊池武朝申狀

尾子家記

原田系圖

丹波地志

閑齋筆記

本朝醫考

名賢文集

諸家系譜指掌録東物語

雜話記

甲陽軍鑑

見聞軍抄

古老物語

荀子

弇州山人四部稿選 蓼花州間錄

古今考

小名錄

侍兒小名錄

老學菴筆記

湘山野錄

三秦記

丹鉛總錄

道山清話

空同子

秘笈

古今類書纂要

古器評

程史

茅亭客話

博物記

博物廣錄

捫虱新話

東坡志林

稗史

楊龜山全書

國史纂要

瀛涯勝覽

性理字義

剪勝野聞

沈存中筆談

錄異記

參同契集解

歲華紀麗

春渚紀聞

稽神錄

教民要錄

寰宇記

金華游錄

夢溪筆談

吳中故詔

金樓子

齊東野語

癸辛雜識

閩部疏

開卷一笑

鏡々居詩州

維摩經

右七十二部

○後編遺編引用書百五十三部蓋載之前編而又重出斯二編者八十一部今省其書目且稱俗說雜書十一部省其書目

○前編二十一卷○後編五卷○遺編五卷都合三十

一卷

附總目錄

三百七十六條

○引證書總計七百三十九部

享保二年正月十五日應談城氏之求書之

肥後隈本

井澤節長秀



